

図書館だより

北海学園大学附属図書館報 第31巻2号(通巻190号) 2009.7.8

vol.31

NO.

2

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

中村睦男

2 憲法25条「生存権」に関する 取材を受けて

米田浩志

3 白い空間の魅力～A.シュティフターの「水晶」から～

桑原俊一 佐藤 信

4 私が薦めるこの1冊：

イチオシ！

5 データベース紹介

6 図書館レポート 2009

アルバイトーク

8 図書館からのお知らせ 編集後記

憲法25条「生存権」に関する取材を受けて

文＝中村睦男

(なかむら むつお／法学研究科教授)

本年5月3日の憲法記念日にNHK教育テレビでETV特集として「いま憲法25条「生存権」を考える」が、夜10時から90分番組で放映された。経済評論家内橋克人氏と『反貧困―「すべり台社会」からの脱出』（岩波新書）の執筆や反貧困の実践活動で活躍している湯浅誠氏との対談を軸として番組は構成されている。その中で、生存権規定の制定の経緯、生存権をめぐる代表的な裁判である朝日訴訟や堀木訴訟の原告の姿や裁判の概要、朝日訴訟を担当した弁護士と2人の憲法学者のコメントなどのVTRが挿入された。私も憲法学者の1人として担当ディレクターから2回にわたる取材を受け、生存権規定の成立の背景や生存権の法的性格に関する学説の展開についての発言が放映された。

数年前までは、新自由主義に基づく構造改革や規制緩和政策を大多数の国民が支持した同じ国で、格差社会、派遣切り、ネットカフェ難民、ワーキング・プアなどがキーワードとして語られていることを、どう説明したらよいのか。いずれにしろ、生存権成立の原点に遡って生存権の重要性を改めて考えるというのが、番組の趣旨である。

生存権の根拠は、憲法25条1項の「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」という規定である。連合国軍総司令部が作成したマッカーサー草案や政府原案には、憲法25条1項に相当する規定はなかったものが、衆議院での審議の段階で、社会党の提案で置かれることになったのである。提案者の一人である森戸辰男は、憲法改正小委員会において、「今日日本に新しい憲法を作るには、この形がぜひとも入らないと日本憲法が今日作られる意義がないと思う」旨の発言をしている。憲法25条1項のモデルになったのが、森戸辰男のほか、高野岩三郎や鈴木安蔵らの民間有識者が作成した憲法研究会案の「国民ハ健康ニシテ文化的水準ノ生活ヲ営

ム権利ヲ有ス」という規定である。

憲法施行1年後の1948年に民法学の大家である我妻栄は、『新憲法と基本的人権』と題する著書を出版して、自由権と区別される生存権的基本権（今日では一般に社会権と呼ばれている）に基本的人権として確固たる位置づけを与え、憲法学説にも大きな影響を与えた。ただし、我妻説は、生存権を裁判上救済されない権利として把握したため、後の学説からプログラム規定説として批判されることになるのである。

裁判所においては、1960年の朝日訴訟東京地裁判決は、厚生大臣の定める生活保護基準を直接には生活保護法に違反して違法としているが、実質的には、生活保護法の規定を通して憲法25条を適用した判決として注目され、実際上も生活保護基準はその後大幅に改善されていくことになった。最高裁判所も、1967年の朝日訴訟判決、1982年の堀木訴訟判決で、それぞれ行政府および立法府の広い裁量を認めているが、生存権が法的権利であること自体は否定していない。

最後に図書館にご報告したいことは、5月3日に放映されたETV特集に本学図書館所蔵の我妻栄『新憲法と基本的人権』の表紙と目次が登場したことである。この本は、名誉教授の小山昇先生の寄贈を受けており、「謹呈 小山学兄 我妻栄」というサイン入りである。新憲法の普及にかける我妻先生の意気込みが伝わってきて私は感動を受けた。図書館の書庫が狭くなってきており、蔵書の増加に図書館も頭を悩ましていることであろうが、書架の整備や重複本を整理するなどして、貴重な古書については寄贈を今後も受け入れて欲しいものである。図書館の電子化が今後の方向であるにしても、書庫で書物を物色し、現物に触れることも教育研究にとって大切なことであると思っている。

白い空間の魅力

～A.シュティフターの「水晶」から～

文＝米田浩志

(よねた ひろし／工学部建築学科教授)

“白以外の何物も無かった。どこを見まわしてもこの白を遮る闇は見当らない。充滿する大いなる光の海のようだった。…万物が、こう言ってよければ、たった一つの白い闇に呑みこまれてしまっていた。”この文章は、ドイツの作家アーダルベルト・シュティフターが著した「水晶」の中からの抜粋である。北海道に生活する者にとっては、臨場感を感じざるを得ない表現である。雪の存在は冬の生活にとって制約となる要素を持ち合せながらも、北海道の文化構造を形成していく上で極めて重要な要素になっている。白い雪景色は体感的には冷たさを感じながらも、安定した建築空間からは視覚的な美しさを楽しむことができる。晴れた日には、雪面がレフ板の役割を担い太陽の光を強くそして広く拡散する。曇りの日には、雪が無彩色の空と一体化し無限定の空間を作り出す。さらに吹雪の時には、周囲は白一色になり、あらゆる対象がその立体感を失う。そこでは均質な光が支配し立体感を伝える影の存在が無い。まさに闇の世界と通底する空間である。闇は、黒と連動して認識されがちだが、闇は白にもある。闇は、必ずしも暗い空間ではなく明るい空間にも存在するのだ。このような白い空間の持っている特性を、抒情的に表現しているのが「水晶」の魅力である。物語は、幼い兄妹がクリスマスイヴの日に雪と氷の世界に迷い込むという内容である。兄妹が雪の中で彷徨いながら見る雪と氷の世界は寒々しいものだけではなく、*“暗闇の中にあちこち々と、雪の細かな斑が不思議な閃きを発し始めた。昼間に吸い込んだ光をいま吐き出しているかのようだった。”*この文章からも兄妹が体験した雪と氷の世界の持っている多様な現象、そしてその美しさを我々は再認識させられる。

北海道の住宅建築は、積雪寒冷地ということもあって高度な断熱性や気密性の技術が求められてきた。これは、冬の生活において外部の寒さを克服しながら安定した生活を営む上で必要不可欠な技術であった。しかし、現代の住宅建築において断熱性や気密性の技術は高度化

し寒冷地住宅としての機能性はほぼ充足されている。残されているのは、北海道にふさわしい豊かな内部空間の探求である。住宅建築は単なる機能が集積された箱ではなく、生きた空間を有するものである。空間の豊かさは面積的な広さではない。吹抜け（容積）などを含めた巧みな空間構成によって内部空間に開放性を作り出す。また開口部の配置によって光をどの方位からどのように導くのか、その方法によって内部空間の質は大きく変わる。開口部の適度な大きさや配置によって、光は内部空間を駆け巡るのである。このように、建築空間に光が生かされれば、必ず豊かな生活環境が得られるであろう。そのためには、過度に自己主張する素材や色は避け光を生かすための舞台作りが必要である。

光を生かすための方法として、白による内部空間の統一がある。壁や天井などを白にすることによって光を拡散させ明るい建築空間を作り出す。光の質も多様で季節によって一日の時間によって強さや色が変わり、そして光を受け止める白からは様々な色が生まれてくる。実は、この白い建築空間は、北海道の雪景色を暗示する存在でもある。どちらも光を受け止めることで多様に変化する極めてベーシックな存在である。この白い建築空間からは、周囲が雪におおわれる冬には外部空間の白と連続化し視覚的な一体感を生み出し、お互いの白さによって無限定の空間を得ることができる。おそらくは「水晶」の中の兄妹が見つめた雪景色の永遠性と同質のものである。建築空間と雪景色との連続化は、北海道の住宅建築においてこれ以上の豊かさは無い。

※「水晶」は、現在以下の書籍で読むことができる。

(引用文章は3の翻訳)

1. 石さまさま〈下〉(シュティフター・コレクション)
翻訳 青木三陽 松籟社 2006
2. 水晶 他三篇一石さまさま
翻訳 手塚富雄 岩波文庫 1993
3. ドイツ〈1〉/集英社ギャラリー「世界の文学」〈10〉
翻訳 須永恒雄 集英社 1991

私が薦める
この1冊

森 有正

『バビロンの流れのほとりにて』(筑摩書房、1968年)

文= 桑原俊一

(くわばら としかず/人文学部教授)

今となつては学生たちにはお堅い本のお勧めとなつたことは承知のうえで、でも読んでほしい一冊です。地中海世界やヨーロッパを旅行する諸君、地図に加え、森 有正の『バビロンの流れのほとりにて』をご持参あれ。機中の時間もまた楽しからずや。

大学に入学してから、読みました。きっかけといわれると確信はないが、ただ「バビロンの流れのほとりにて」、という言葉の響きが心に残っていた。欧米文化に興味を持っていた私は数頁巻るとすぐに虜になった。日記風に書かれた文章ゆえであろうか、彼が生きた時代の西欧時代精神が僕の心に心地よく、計算尽くされたバッハのG線上のアリアのように波打ち始めていた。彼の思索は決して十分咀嚼できたわけではないし、理解するのは容易でない。しかし、時代の寵児たちとサロンを通して親交を深めいくなか

で、苦闘しながら自らの言葉で紡ぎだされたことははなごむ色彩を放っていた。それは今まで疎遠にしか思えなかった非日常的なことばを巧みに演出していた。その意味で一連の彼の随想的作品は決して眠れぬ夜のベットタイム ストーリーではなかった。だが、にほん語離れした文体と深い西欧文化の理解を弁えたことばの力はわたしにかけがえのない青春を与えてくれた。以来学生時代は森 有正とともに歩んだともいえる。森を総門に、高田博厚の芸術論と出会い、ロダンやピカソ、高村光太郎などの作品や彼らのサロンでの交流から照射される熱情を羨んだ。彼らの日常に触発され、アランやヴァレリーも一通りは読破した。彼らの書籍は今も私の書棚の一等席を占めている。

私が薦める
この1冊

梅田望夫

『シリコンバレーから将棋を観る』(中央公論新社、2009年)

文= 佐藤 信

(さとう まこと/経済学部教授)

タイトルにあるように将棋に関する本である。しかし著者が語りたかったことは、単に将棋の話だけではない。インターネット時代が、人間と社会に何をもたらすのか。将棋界で起こっていることが、未来社会を解き明かすヒントとなるのではないか。シリコンバレーに住みながら、ウェブを通して将棋を観戦し、時には対局場に足を運び、トップ棋士たちとの対話を通して、上記の仮説を明らかにしようとしたのが本書である。

主役は羽生善治名人。著者は羽生を、「凡人には見えない未来をイメージし、そこに向けての第一歩を踏み出す人」、「未来の本質を示唆する何かを表現する」人であると言う。羽生の言動の端々に、インターネット社会の将来を暗示する何かが含まれているからだ。例えば、将棋の全ての戦型、定跡を調べ直し、それを公にしたこと(知のオープン化と情報の

共有)。将棋界という村社会における独特の伝統、暗黙のルールを破っていったこと(陋習の打破)。「創造性以外のものは簡単に手に入る時代」と言い切ること(コモディティ化の承認)がそれである。わが国の自動車や家電、半導体産業のコモディティ化と同じ状況が将棋界にも現れている。この閉塞状態を打開し、新時代のイノベーションを起こすためには何が必要か。著者は、世界中の情報を集め整理し尽くすグーグル社を例に出す。いつか「量から質へ転化する瞬間があるはずだ」と仮説を立て実行する存在として。そして、羽生がグーグル社とまったく同じ思考で行動していたことを発見する。

本書は著者の意向で翻訳自由とした。現在、世界中の有志によって英訳と仏訳が進められている。出版の未来についても考えさせられる1冊である。



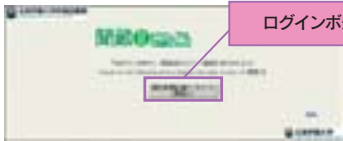
データベース紹介



朝日新聞記事データベース [聞蔵II]

昨年度より始めましたデータベース紹介ですが、今回は聞蔵IIをご紹介します。

このデータベースは朝日新聞の記事はもちろんのこと、雑誌AERAの記事も検索できるので、様々な場面で活用できるでしょう。



ログインボタンをクリックする。



ここにキーワードを入力する。

キーワードを入力し、検索実行を押すと、下記↓のように検索結果一覧が表示されます。



ここをクリックすると



図書館では、オンラインデータベースの使い方を説明する講習会を行っております。
詳しくは図書館ホームページ、館内掲示物等をご覧ください。

図書館レポート

Library Report

2009

蔵書冊数

(2009年3月31日現在)

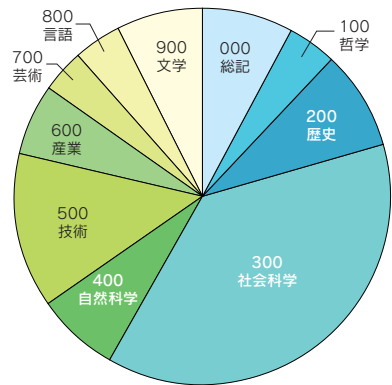
	和書	洋書	合計
蔵書冊数	650,392	206,150	856,542

ちなみに2008(H20)年度の1年間の受入図書冊数は、**25,717**冊でした。学術雑誌は、9,000種を超えるタイトルを所蔵しています。



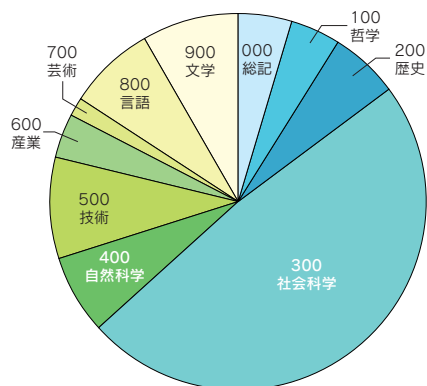
和書

	累計(冊)	割合(%)
000 総記	50,104	7.8
100 哲学	26,827	4.2
200 歴史	54,758	8.5
300 社会科学	240,986	37.6
400 自然科学	45,666	7.1
500 技術	85,484	13.3
600 産業	39,236	6.1
700 芸術	23,836	3.7
800 言語	26,451	4.1
900 文学	47,574	7.4
計	640,922	100



洋書

	累計(冊)	割合(%)
000 総記	9,267	4.6
100 哲学	8,767	4.3
200 歴史	11,967	5.9
300 社会科学	97,845	48.5
400 自然科学	13,684	6.8
500 技術	17,622	8.7
600 産業	7,748	3.8
700 芸術	3,167	1.6
800 言語	15,062	7.5
900 文学	16,770	8.3
計	201,899	100



※論文、除籍は除く

—カウンター・サービス関係統計—

	2006年度	2007年度	2008年度
入館者数	342,922人(1日当り1,216人)	336,528人(1日当り1,224人)	349,663人(1日当り1,253人)
貸出者数	33,066人(うち学生26,523人)	31,940人(うち学生24,731人)	31,877人(うち学生28,612人)
学生一人当りの貸出回数	3.0回	2.7回	3.2回
貸出冊数	58,194冊(うち学生42,930冊)	58,896冊(うち学生40,538冊)	59,477冊(うち学生52,432冊)
学生一人当りの貸出冊数	4.9冊	4.5冊	5.8冊
PCブース利用者数	6,266人	5,008人	3,408人
AVブース利用者数	5,891人	6,180人	5,069人

—レファレンス・サービス関係統計—

●学内レファレンス業務

	教職員	(前年度対比)	学 生	(前年度対比)	その他	合 計	(前年度対比)
文献所蔵調査	74	-18	74	-57	37	185	-53
事 項 調 査	3	+3	1	-3	10	14	+5
利 用 指 導	3	+2	1	-4	0	4	-4
そ の 他	1	-5	0	-1	2	3	-8
合 計	81	-18	76	-65	49	206	-60

●相互協力業務

1. 複写

	国 内	前年度対比	国 外	前年度対比	合 計	前年度対比
依 頼	507	+54	2	-16	509	+38
受 付	1,337	-341	0	±0	1,337	-341
合 計	1,844	-287	2	-16	1,846	-303

2. 貸借

	国 内	前年度対比	国 外	前年度対比	合 計	前年度対比
依 頼	118	-38	2	-1	120	-39
受 付	366	+28	0	±0	366	+28
合 計	484	-10	2	-1	486	-11

3. 文献所蔵調査

	国 内	前年度対比	国 外	前年度対比	合 計	前年度対比
依 頼	38	+24	0	±0	38	+24
受 付	12	+3	0	±0	12	+3
合 計	50	+27	0	±0	50	+27

4. 他館への利用願

	国 内	前年度対比	国 外	前年度対比	合 計	前年度対比
依 頼	85	+45	0	±0	85	+45
受 付	27	+3	0	±0	27	+3
合 計	112	+48	0	±0	112	+48

パッチュイとの邂逅

文=張 健華

(ちょう けんか)

人文学部文学研究科 博士課程1年

「こいつは蝙蝠のように生きてきたようなものだ。日本人でもなく、韓国人でもなく……」。

飯尾憲士の『パッチュイ (蝙蝠)』(1980年発表、『(在日)文学全集』16-II 収録)の一節である。文中の「お父さん」は大正時代、19歳で日本に渡ってきた。「日本内地で生涯素姓を隠し続けた父親」は、「自分の姓を子供につけることができないだけでなく、一人で四つも名前を持っていた」。「本名の他に創氏改名の姓、妻の姓、更にどういう理由からかもう一つの日本姓の、四つの名前を持っていた」。

ここでは、普段目にできないもう一つの世界があった。「パッチュイ」たちの世界である。

「父も、日本内地で生涯パッチュイであった」。

「母もやさしいパッチュイであった」。

そしてその息子も「パッチュイのままでよい」と思う。

私は『パッチュイ (蝙蝠)』に導かれ、大正・昭和の時代を垣間見ることができた。更にこれまでまったく意識したことのない一群の人々の心の叫びを聞くことができた。

本とはまさにそのような存在。海を、山を越え、時代までも超えて、どこまでもどこまでも飛んでいけるように導いてくれるありがたき存在なのだ。

最後の一行を読み終え、私は思った。もしかしたら、今日私と一緒にコーヒーを飲んだ人の中にパッチュイがいたかもしれない。そしてそのパッチュイも、眩しい太陽の下で、あの青い空を思いっきり飛んでみたい夢だけは持っているだろう、と。

休館のお知らせ

館内作業のため、下記の日程で図書館(本館、工学部分室)を臨時休館させていただきます。ご迷惑をおかけしますが、ご理解とご協力のほどをお願いいたします。

平成21年9月16日(水)～9月18日(金) 9:00～17:00

なお、本館は17:00～22:00 工学部は17:00～20:00 までは通常通り開館いたします。

編集後記

図書館で働いていながら、本を日常的に読むという機会はほとんどない、漫画を読むくらいである。

働いている時に本を見ているのに、プライベートまで本を読みたくなれないと言う。(読まない言い訳)

でも図書館で働いていても読書が趣味な人はたくさんいる。単純に読むと言う行為に対して、逃げているだけ! なんだと思わされる。

これを読めば、勉強になるんだろうなあとか読んでみたい

なあとか思う本はけっこうあるのだが、少しだけ読んですぐに挫折してしまう。毎度、毎度のことである…たぶん自分には集中力がかけているのだと思う。記憶に新しい所でWBC日本代表を優勝に導く決勝タイムリーを打ったイチロー選手のここ一番での集中力は測り知れないものを感じる! 日々の鍛錬から出たものに違いない! 本館開架『イチロー式集中力』(分類783.7/KOD)を読んで自分に足りない所を磨こうと思う。できるかな…